

平成22年5月21日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19320121

研究課題名（和文） 近代イギリスにおける多元社会の歴史的展開

研究課題名（英文） Historical Research on the Plural Society in Modern Britain.

研究代表者

指 昭博 (SASHI AKIHIRO)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：90196197

研究成果の概要（和文）：多文化社会として近代イギリスを見た場合、「寛容」がいち早く浸透した成功例として捉えられることが多かったが、歴史的な事例をもとに再検討すると、そういった共存の背後には、「見えない壁」として包摂と排除の境界や監視があったことが明らかである。その線引きは、人種や宗教といったものから、年齢、さらには価値観といったものでも容易になされたのであり、多文化状況への寛容は極めて脆弱な基盤の上に成り立っていた。

研究成果の概要（英文）：The modern Britain has been sometimes regarded as a ‘successful’ plural society. But some historical evidences indicate that such image was rather superficial and there were some ‘invisible barriers’ to exclude various minority groups, categorized by ethnicity, religion, age and so on. The plural society in modern Britain was/is built on the fragile foundations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2008年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：イギリス 多元社会 マイノリティ 移民 エスニシティ 寛容

1. 研究開始当初の背景

これまでイギリス社会は、多文化社会として、異文化との共存に比較的成功した例として肯定的に取り上げられることが多かった。しかし、2005年に起こったロンドンでの同時多発テロ以後のイギリス国内のイスラム教徒への対応に見られるように、その共存は必ずしも安定したものではなく、場合によって

は異文化や異宗教に対して、容易に非寛容に転じるような不安定で、意識の上でもアンビバレントな要素を含むものであることが明瞭になった。こういった現実を前にして、これまでの通説的なイギリス社会理解を見直す必要が生じた。従来のイギリス理解の背景には、歴史的な文脈から説明される側面が多かったことから、当然、歴史研究として、こ

の問題を取り上げる必要性を感じるに至った。

2. 研究の目的

多文化社会としてのイギリスが抱えた矛盾は、歴史的に見た場合、近世以降、多文化社会としての性格を強めていく過程で解消されてきたわけではなかった。本研究では、外国人や移民、宗教的・社会的なマイノリティなど、これまで看過されがちであった存在に目を向け、あからさまな排除でも融合でもない、いわゆる「周縁的な」存在と在来の社会との間に横たわった「見えない壁」を明らかにする。そこから、同質的な社会に回収されることのない「多元社会」としての近代イギリスの姿を、その歴史的展開のなかに位置づけて考察すること、すなわち、様々な意味合いで「異質」な存在が、ひとつの社会の中でいかに「共存」してきたのかを、その限界や破綻に注目しつつ検討する。さらにはその成果を踏まえて、急速に多文化混在状況が進展する現代の世界を考えるための歴史的な視座を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

研究を進める手法としては、研究分担者による個別テーマの調査研究と、それらの成果をもとにした研究会の場での討論を組み合わせ、議論の深化を図った。

取り上げた個別テーマは、宗教的マイノリティとしてのカトリック教徒、近世における移民・難民、植民地における混血児、老人などである。また、そういったマイノリティとの関係をとらえる当時の思想的な枠組みを検証する研究も行った。

さらに、本研究では、イギリスの事例を他国の例と比較することで、その歴史的な特徴を明らかにしようと試みた。そのため、近世オーストリア史と20世紀のアメリカ合衆国における日系移民研究を専門とする研究者にも研究分担者として参加を求めた。

とくに研究会の場では比較史的な観点を重視した議論を意識的に行った。たとえば、移民・難民などの問題について議論した研究会では、多民族国家であった近世オーストリアの事例と対比することで、同時代のイギリスとの違いの大きさを明らかにし、イギリスの特徴をより鮮やかに示すことができた。

4. 研究成果

まず、本研究に参加した研究分担者による個別の研究成果は以下の通りである。

(1) 指昭博(研究代表者)は、18世紀半ばのイングランド北部ノーサンバーランドのハートバーン教区におけるカトリック教徒の調査報告の手稿史料を用いて、近世におけるカトリック教徒のコミュニティの実態を分

析した。

調査報告には、100名ほどのカトリック教徒がリストアップされているが、その多くが生まれながらのカトリック教徒であり、家族としてまとまって信仰を維持し、数十年にわたってその教区に平穩に暮らしている者が多いことがわかる。すなわち、違法な存在であるはずのカトリック教徒が、地域社会の中に「居場所」を得ていたことになる。その際、カトリック・コミュニティの維持に重要な役割を果たしたのが、在地のカトリック・ジェントリの世帯であったことも、リストから確認できた。

その一方で、新たに移入してきたカトリック教徒や新たな改宗者も教会によって把握されていた様子がリストから窺える。すなわち、この史料からは、あからさまな迫害・弾圧ではないものの、教会の監視下におかれた宗教的マイノリティと体制教会との、寛容と監視の狭間にあった「共存」の実態をうかがうことができる。

(2) 中川順子は、近世における帰化をめぐる問題から他者受容とその法的地位についての研究を進めた。

在英外国人が最多であった近世ロンドンを中心に、外国人の法的地位の実態、地位に付随する権利処遇に係る議論・言説を分析・考察することで、外国人とホスト社会の共生について、これまで画一的に評価されてきた「外国人嫌いのイングランド人」という解釈に見直しを迫った。

研究の結果、明らかになったことは、次の四点である。第一に、法的地位をめぐる研究史上における転機としての近世の重要性。第二に、16世紀後半においては、授与された法的地位としてはデニズンが多い。1570年代前半以前に取得した者では、フランス・低地地方出身という傾向が顕著で、法的地位の問題は当時の社会事情と密接に関連していた。第三に、外国人人口に占める法的地位取得者の割合は低く、その背景には、自らの権利の縮小を恐れて、それに不満を示しつつも、移民がホスト社会からの反発に敏感であって、一定の距離を保とうとする外国人の姿勢が垣間見られる。第四に、外国人の法的地位とそこに付随する権利は、とくに経済状況が悪化したときには、ホスト社会にとって、あらゆる層を巻き込んだ論争を引き起こした。そこには、外国人を他者として排除したい一方で、宗教的同胞として救済すべき存在として移民たちを庇護すべきであるとの感情の混在が見られた。結果的に、従来強調されてきたような「外国人嫌い」、「支配層による外国人優遇、下層の人々による外国人排斥」といった外国人に対する極めて画一的で強い反感も、支配層による判で押ししたような好意的な対応も、その両面が相対化されるべきもの

であることが明らかになった。場当たりの外国人への法的地位授与が示すのは、他者に対してアンヴィバレントな対応を取りながら自己形成を模索するホスト社会の姿である。デニズンから帰化へと法的地位をめぐる議論の重点が移る近世を通じて、他者と自己の中身が問われ、差違化が繰り返し求められた。それは、18世紀初頭の一般帰化法をめぐる議論にもつながってゆく。ホスト社会の態度の中の曖昧さが、外国人共同体と外国人(移民)の存在を許容したのである。

(3) 中沢(並河)葉子は、ミドルクラスの反奴隷制運動と日曜学校運動への関わりから、異なる人種や階層の人々を社会の中にどのように位置づけようとしていたのかについて、19世紀に大きな意味を持つてくる「家族」という価値観との関わりにおいて検討した。とくに、ハナ・モアとクラバム派のソーシャル・リフォーム運動を中心に研究を進めた。

18世紀末から19世紀初頭にかけて展開されたモラル・リフォーム運動には、国内だけではなく、帝国全体の社会改革を視野に入れたものであった。反奴隷制運動や、貧困層の子どもの教育を推進する日曜学校運動がその代表例である。これらの運動には様々な人々が関わっており、その理想や動機は必ずしも同じではなかった。

ハナ・モアは、クラバム派と行動をとともにしたが、彼らは、自分たちが理想とする「家庭」像の実現を目的に掲げた。奴隷制度反対も、それが家族の離散をもたらすことが大きな理由であったし、日曜学校運動も、本来家庭でなされるべき教育を「家庭」を持たない貧困層の子どものために施すという理念に基づいていた。

しかし、クラバム派の人々は、解放された黒人貧困層を自分たちの社会に受け入れる方策を示すことはなかった。増え続ける黒人貧困層をシエラレオネに送還し、そこに西欧風の社会を作ること—すなわち「排除」によって一問題を解決しようとした。

また、クラバム派が理想とした「家族」をモデルとした社会改良のパターンは、19世紀以降も、ミッション活動の海外展開において踏襲されていった。

(4) 水谷智は、イギリス帝国の人種秩序と植民地インドでの白人系「孤児」の問題を取り上げ、スコットランド人宣教師ジョン・グラハムが設立した孤児院「セント・アンドリュース・コロニアルホーム」と帝国の社会権力とのつながりを、とくに「ユーラシアン(白人系混血者)問題」の関連で考察した。

ユーラシアン問題とともに、定住化したヨーロッパ人の貧困化も、白人の威信・帝国の支配への脅威と見なされていた。そのため、ユーラシアンなど貧困家庭の子どものインド社会から隔絶した養育施設において教育

し、移民として海外へ送り出すことがユーラシアン問題の解決と人種秩序の安定化をもたらす方策とみなされたのである。

しかし、この事業には限界があった。実際には全員を海外に移住させることは不可能であり、施設卒業生の多くがインドに留まった。また、海外へ出た者も、オーストラリアの「白豪主義」など、イギリス帝国の人種主義的な世界観が支配している社会の中で、やはり排除の対象となった。

それでも、20世紀になってもグラハムの方策への社会的評価は揺るぐことなく、期待が寄せられた。貧困者の子どもを隔離し、施設に収容することは、混血によって脅かされた人種秩序の再建の理想的な手段とみなされ続けたからである。

(5) 戸渡文子は、世紀転換期のイギリスにおける老齢年金制度をめぐる議論を、1908年の老齢年金法成立過程に焦点を当て、世代およびマスキュリニティの観点から読み直した。

19世紀末の選挙法改正をとおした国民再編成の過程で、マスキュリニティは、イギリス国民内部における、中産階級/労働者階級、男性/女性という差別の構造化に寄与した。そればかりか、マスキュリニティは、労働者と彼らに扶養される高齢者という世代関係が形成される過程でも重要な役割を果たした。

1870年代と80年代におけるブラックリの国民保険制度をめぐる議論を考察すると、当時、老齢は、疾病とともに、男性労働者の労働力と自立を脅かすリスクとして認識されたことが明らかである。すなわち、国民保険制度は、そのリスクから「男性」労働者を防衛する制度として提案され、「すべての労働する男性の義務」という言説は、「若い労働者」と「扶養される老人」という関係をも構築するに至ったのである。

(6) 光永雅明は、ジョン・ステュアート・ミルの『自由論』(1859年)に焦点を絞り、とくに「寛容の限界」という側面に重点を置いて、寛容思想史を検討した。

周知のように同書でミルは、他者に危害を与えない個人の行為は社会的に禁じ得ないと論じ(「危害原則」)、多様な思想や生活様式を容認する現代的な寛容思想への道を切り開いた。他方『自由論』は「寛容の限界」に関しても多くを論じている。近年の諸研究も指摘するように、ミルは西洋中心主義的な進歩史観に基づき、寛容の対象を「先進的な」諸民族の成人の行為に限定した。またその成人の行為も、他者に危害を与える場合には寛容の対象外とされた。そのような行為の代表的な例としてミルが強調したのが人口過剰国における貧者の出産であり、D・ウィンチらが示すように、この主張はマルサスの人口思想に由来していた。本研究では、W・マコ

ールや G・J・ホリヨークなどの同時代人が、マルサス的な人口管理志向こそ『自由論』もしくはそれを含むミル思想の大きな特色であると論じていたことも明らかにし、ウィンチらのミル理解を補強した。また、ミルの人口抑制論は、1970年代に台頭したイギリスの急進的な環境保護主義においても積極的に参照されていたことから、『自由論』の歴史的遺産は、その人口管理志向を含めて再評価すべきことを示した。

(7) 山之内克子は、同じドイツ語地域に属しながらも、ウィーンとプロイセンでは、その文化嗜好に大きな隔りがあり、それが偏見を生む過程を、同時代の言説分析によって明らかにした。

ヨーゼフ 2 世による啓蒙主義改革の下で、それまでの保守的カトリックの牙城であったウィーンは、文化的には自由で開放的な都市に変貌した。この「啓蒙のユートピア」にドイツの知識人の関心が向かうことになる。

ベルリンの出版業者フリードリヒ・ニコライの旅行記は、北方ドイツのプロテスタントの目から見た「異文化地域」としてのウィーンの姿を示す史料であるが、ニコライの目には、ウィーンは「贅沢」と「浪費」「享楽」に満ちた「不道徳」な都市と映り、厳しい批判の対象となった。

また、ウィーンを訪れた北ドイツ人には、ウィーンのカトリック信仰や、それに伴う制度・儀式・習慣も、啓蒙とはほど遠い「蒙昧」の表れにしか見えなかった。

こうした北ドイツのプロテスタントのウィーン訪問は、「啓蒙のユートピア」イメージを再び「蒙昧の支配する土地」へと塗り替えていった。「高い精神文化を通じて実現されるドイツ民族の統一」といったプロテスタント的な価値観を絶対的な基準としたこうした言説は、ウィーンを異質なものとしてドイツ文化の流れから切り離してゆくことになった。

(8) 南川文里の研究は、同じ英語文化圏であるアメリカ合衆国とイギリスとの比較によって本研究の成果をより充実させた。南川は、幾多の論考や学会発表を通じて、20 世紀初頭のアメリカ合衆国における日本人移民の実態とその意識を明らかにする精緻な研究を行い、その成果を本研究にも反映させて、そうした比較研究に貢献した。

個別研究では、「移民の国」合衆国の多元主義から「排除される」側に位置づけられた人々が、「移民の国」の理想と現実をどのように受け止めていたのかを、20 世紀初頭に激しい排斥運動の対象となった日系移民の観点から、カリフォルニアで刊行されていた『羅府新報』を中心に展開された「シヴィック・ネーション」をめぐる議論を軸に考察した。そこから、20 世紀初頭のアメリカ多元主

義が「包摂と排除」の境界線を引くと同時に、境界線を曖昧にする作用をも持っていたことが確認された。

以上の個別研究および研究会等での討議などを総合して得られた近代イギリスの歴史像としては、多元的な社会を支える理念である「寛容」は、決して無限定のものではなく、その裏面に包摂と排除の論理や「監視」を伴うものであったことが明らかになった。また、それは、ひとり近代イギリス本国だけではなく、イギリスの植民地（帝国）や現代のアメリカ合衆国にも見られたものであった。また、そういった「排除＝線引きの論理」を導く要因は、宗教や人種、文化、性別、など多義にわたり、共存・排除が、必ずしも理論的に筋道立ったものではなく、極めて情緒的・感覚的になされたことは、イギリスの事例はもちろん、近世ウィーンをめぐる言説からも明らかである。

今後の課題としては、従来の「国民統合」を主な指標にしたマクロなアイデンティティ論ではなく、同じ社会に住む人々の間に障壁を設けるような、よりミクロなレベルでのアイデンティティ形成のメカニズムやその実態の検証、そういった意識を方向付ける要因のさらなる解明が問題となる。その解明によって、旧ユーゴ内戦のように、それまで安定していた社会が一気に崩壊し紛争に至るような多文化社会の持つ脆弱性を認識し、その克服への道を探ることに寄与するだろう。その際、本研究の成果は、考察を支える事例研究を蓄積したという面でも貢献することになる。

なお、本研究によって得られた成果の一部は、研究分担者である光永雅明を編者に、イギリスの事例を中心にまとめた論文集（仮題『文化的多様性のイギリス史』世界思想社）としても 2010 年度の刊行を予定している。この論集の刊行により、本研究の成果が広く公開され、さらなる研究の刺激となることが期待される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

①南川 文里、多人種都市ロサンゼルスと環太平洋の想像力：リトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験から、立命館言語文化研究、査読無、21 巻 4 号、2010、近刊。

②水谷 智、多文化主義的統治性の限界における文化間関係、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、査読無、86 巻、2010、11-37。

③Satoshi Mizutani, Loyalty, Parity, and Social Control—the Competing Visions

on the Creation of an 'Eurasian' Military Regiment in Late British India, *International Journal of Anglo-Indian Studies*, 査読無、10巻、2010、HTML形式

④水谷 智、イギリス帝国の人種秩序と植民地インドの白人系「孤児」—ジョン・グラハムの教育事業—、西洋史学、査読有、239号、2009、39-59.

⑤水谷 智、＜比較する主体＞としての植民地帝国—越境する英領インド教育政策批判と東郷實、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、査読無、85巻、2009、1-29.

⑥Satoshi Mizutani、Hybridity and History: A Critical Reflection on Homi K. Bhabha's 'Post-Historical' Thought, *Zinbun* (京都大学人文科学研究所)、査読有、41巻、2009、1-19.

⑦南川 文里、社会編成としてのエスニシティ：エスニック多元主義の批判的検証のために、理論と動態、査読無、2巻、2009、3-17.

⑧南川 文里、リトルトーキョーの再建？：再定住来期におけるコミュニティと人種間協定主義、アメリカ研究、査読有、43巻、2009、135-153.

⑨中川 順子、17世紀前半のイングランドにおける帰化取得者とデニズン、文学部論叢（熊本大学文学部）、査読有、100号、2009、69-80.

⑩山之内 克子、啓蒙期ウィーンにおける新しい「交際の間」—カロリーネ・ビヒラー『時代絵図』を中心に—、外国学研究（神戸市外国語大学）、査読無、73巻、2008、1-26.

⑪並河 葉子、イギリスにおける初等学校教育と聖書教育—啓蒙主義と福音主義の接点—、外国学研究（神戸市外国語大学）、査読無、73巻、2008、27-39.

⑫戸渡 文子、世紀転換期イギリスにおける老齢年金制度とマスキュリティ、歴史学研究、査読有、844号、2008、11-20.

⑬指 昭博、(書評) 深沢・高山(編)『信仰と他者』、史学雑誌、査読有、117編1号、2008、77-82.

⑭南川 文里、日系人／日本人女性のアメリカ経験：日系移民女性から留学ツーリズムまで、外国学研究（神戸市外国語大学外国学研究所）、査読無、66号、2007、27-41.

⑮水谷 智、植民地主義と近代性の関係を再考する：フレデリック・クーパーの論考から、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、査読無、79巻、2007、173-185.

〔学会発表〕(計9件)

①並河 葉子、クラパム派・その形成と後世への影響、社会経済史学会・近畿部会、2009年11月21日、神戸学院大学.

②南川 文里、多人種都市ロサンゼルスと環太平洋の想像力：リトルトーキョー／ブロン

ズヴィルの経験から、国際シンポジウム「環太平洋地域における日本人の国際移動」、2009年10月11日、立命館大学.

③南川 文里、シヴィック・ネーションの拡張性を見透かす：1920年代の日系移民による「排除／包摂」の経験、日本アメリカ史学会第6回年次大会・シンポジウムA、2009年9月20日、名古屋大学.

④南川 文里、エスニシティに編み込まれる「歴史」：アメリカ日系人における「世代」の言葉、関東社会学会第57回年次大会テーマ部会、2009年6月21日、お茶の水女子大学.

⑤Junko Nakagawa、The image and the reality of the 'Poor Palatines' in early eighteenth-century London、British Society for Eighteenth-Century Studies 38th Annual Conference、2009年1月7日、St Hugh's College, Oxford.

⑥南川 文里、アメリカ合衆国における日系エスニシティの類型化とその条件、第81回日本社会学会大会、2008年11月24日、東北大学.

⑦Yoko Namikawa、The Female Missionaries and the Dissemination of the Modern British Family Ideal in the Second Half of the 19th Century in Japan, *Women's History Scotland*, 'Gendering Imperialism: Home, Colony, and the Construction of Gender Identities', 2008年11月8日、Edinburgh University.

⑧南川 文里、Trans/national Formations of 'Japanese America': Prewar, Postwar, and Beyond、日本アメリカ学会、2007年6月10日、立教大学.

⑨南川 文里、アイデンティティ・国民化研究の新しい地平、日本アメリカ史学会、2007年12月1日、東洋学園大学.

〔図書〕(計6件)

①山之内 克子、他、昭和堂、(松塚・八織編)『識字と読書—リテラシーの比較社会史』、2010、156-184.

②指 昭博(編)、刀水書房、王はいかに受け入れられたか—政治文化のイギリス史—、2007、217.

③南川 文里、彩流社、「日系アメリカ人」の歴史社会学：エスニシティ、人種、ナショナリズム、2007、289.

④南川 文里、人文書院、(米山裕・河原典史編)日系人の経験と国際移動：在外日本人・移民の近現代史、2007、27-49.

⑤南川 文里、他、世界思想社、(御輿哲也編)＜移動＞の風景：英米文学・文化のエスキス、2007、176-196.

⑥南川 文里、他、明石書店、(移民研究会編)日本の移民研究：動向と文献目録Ⅱ、1992年

10月～2005年5月、2007、59-63.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

指 昭博 (SASHI AKIHIRO)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：90196197

(2) 研究分担者

山之内 克子 (YAMANOUCHI YOSHIKO)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：70267441

光永 雅明 (MITSUNAGA MASA AKI)

神戸市外国語大学・外国語学研究所・准教授

授

研究者番号：20229743

中沢 葉子(並河 葉子)

(NAKAZAWA YOKO) (NAMIKAWA YOKO)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：10295743

南川 文里 (MINAMIKAWA HUMINORI)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60398427

中川 順子 (NAKAGAWA JUNKO)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：00324731

水谷 智 (MIZUTANI SATOSHI)

同志社大学・付置研究所・講師

研究者番号：90411074

戸渡 文子 (TOWATARI AYAKO)

大阪大学・文学研究科・招聘研究員

研究者番号：30432529